

【北海道特別支援学校生活体験発表会最優秀作品】

（肢体不自由・病弱特別支援学校の部）

作文部門 小学部）

「自分だけではない！」

北海道手稲養護学校 小学部六年

殿山 晃基

君は大きな病気になったことはあるかい？病気にかったことがある人、もちろん病気にかったことがない人にも読んでほしい。これを読んで、勇気や自信をつけて、とまでは言わない。けれども僕の考えを分かってもらいたい。

病気が分かったのは、小学校三年生ときだった。始まりはスキーをすべり終わったときだった。急に腰が痛くなった。始めは筋肉痛だと思った。しかし、痛みは続いたので、おかしいなと思い、病院に行った結果、腰にある神経に關係する病気だとわかった。

その後、僕は学校で病気のことを話した。すると、みんなが優しく接してくれるようになった。親も、友達も、周りの人が優しくなった。僕は色々な所で助けてもらった。例えば、僕の代わりに体育の時間とき、多く走ってくれたり、重いものを持ってくれたり、運動のことから手伝いのことなど、色々な場面で助けてもらった。

しばらくして、僕は手術することになった。三年生の

冬だった。手術を終えると、僕は両親と一緒にいた。手術後はつらかった。四日間、何も食べたり飲んだりできなかった。その後は、しっかり歩けるようになったり、座ったりできるようになるためのリハビリが毎日続いた。とても痛くつらかった。

その後、退院して普通の生活に戻った。しばらく痛みはなかった。しかし、四年生とき、また腰が痛くなった。そしてまた手術することになった。それも退院せずに二回も。僕は思った。なんで僕だけこんな目にあわなければならんだ。僕はそう怒っていた。あそこに行くまでは。

僕のお母さんは、他の病院を探していた。そこで見つけたのが北海道子ども総合医療・療育センターだった。僕は、その病院に行った。すると、病院と学校が渡り廊下で繋がっていて、なにこれ？と思った。初めは、学校を休んで行ったり、夏休みや冬休みに診察しに行ったりしていた。体の柔らかさや、曲がる角度などを見てもらったり、その他にも病気について難しいお話をしたりしていた。そこで入院の話が出てきた。座って卒業式に出るためらしい。このときの僕の状態は、ずっと寝たきりの状態だったため、このままだと痛みで座って卒業式に出られなそうだったからだ。少しでも良くなるために僕は入院することにした。

それから数日たち、入院日になった。僕は病院にむかう途中で、また入院か、これで何回目だろうと思った。

病院に着いたら看護師さんは色々教えてくれた。病院内の生活は、寝る時間が九時から十時ということ、スマートフォンやインターネットが使えないことなどを教えてくれた。お母さんは、

「土日は迎えに来るから。」
と言ってくれた。僕はうれしかった。

お母さんと看護師さんの長い話が終わり、病棟に入った。すると、僕が思っている病棟の雰囲気とは違った。何が違ったかというと、ベッドに横たわる人がたくさんいた。僕は歩いていたり、車椅子に乗りたりしている人がたくさんいて、自由に動いているのを想像していた。しかし、違った。独歩の人は少なかった。他にも違うところがあった。一人一人の個人部屋かと思っていたが、想像と違い、部屋が二人から六人まで共同して使う部屋だった。僕は驚いた。その日、ぼくは部屋で思った。「つらいのは自分だけではない」と。

これが僕の考えたことや経験したことだ。ぼくはそれからリハビリなども努力している。そして、それはこれから。このような経験をしてよく自身に考え方の変化があった。それは「苦しいのは自分だけではない。他の人だって苦しんで頑張っている。周りの人も他の人も。だからこそ自分も頑張らなければならない。」ということだ。そして病気にかかってない人、周りの人をお願いする。差別や偏見をやめて、そのような人と一緒に頑張つてほしい。もしかしたらあなたがいることで、病気になる

った人が頑張れるきっかけになるのかもしれないから。それから病気になった人へ。それに応えるために一緒に頑張ろう。

（肢体不自由・病弱特別支援学校の部）

作文部門 中学部）

「Plus Ultra（プルスウルトラ）」

北海道手稲養護学校三角山分校 中学部三年

伊藤 悠斗

Plus Ultra（プルスウルトラ）とは、ラテン語で「もっと先へ、もっと向こうへ」を意味する言葉です。

世の中には「スパイファミリー」「ワンピース」「ハンター・ハンター」「まどかマギカ」など、たくさんの漫画があります。僕も今までいろいろと読んできました。その中で僕が面白いと感じたのは、「スパイファミリー」「ワンピース」「僕のヒーローアカデミア（ヒロアカ）」です。少し内容を話すと「スパイファミリー」は、赤の他人だったスパイの男、殺し屋の女、超能力者の少女が「かりそめの家族」を築き、「家族としての日常」を送るために日々のトラブルと奮闘するホームコメディです。「ワンピース」は、海賊王を主人公とする「ひとつなぎの大秘宝（ワンピース）を巡る海洋冒険ロマンです。」「ヒロアカ」

は、主人公が最高のヒーローを目指して成長していくヒーロー漫画物語です。紹介した作品はすべて人気のある漫画ですが、しかし、はやらない漫画もあります。

僕は今まで、はやっていない漫画は見たり、手にとってもいませんでした。ある日、「ジャンプ」を読んでいたときに「ウィッチウォッチ」という漫画が連載開始されていきました。面白くないだろうと思いつながら読んでみたら、今まで読んだことのない漫画の種類だと思いました。

「ウィッチウォッチ」は、魔女の主人公と使い魔たちの日常を描いているのが面白いと僕は思います。はやっていないけれども面白い作品があるのか、とわかり、それから知らなくても読んでみようと思うことができました。

時代に合っていないと、はやらないこともあります。このようになかにはおもしろいものもあります。なのではやっていないからといって読まないのはもったいないと感じました。みなさんも、この漫画はおもしろくなさそうだから読まないとか、これは苦手だからやらない、これには興味がないと思っても、読んでみたり、挑戦したりして、Plus Ultraをモットーに新たな一歩を進んでみたらどうでしょうか？

「高校へ行くべきか」

北海道手稲養護学校三角山分校

中学部三年

和田 輝政

皆さんは高校へ行くことをどう思いますか？

私にとって、高校はまるで牢屋に入るみたいです。理由は、私の行く高校が病院と隣接しているところだからです。私が行く高校の入学条件は病続に入院することが原則でした。つまり、高校へ行くと家族と離れ離れになり、自立することになるのです。私は家族が大好きなので、もう家族と一緒に過ごすことはできないのか？とすごく辛い気持ちになりました。

元々は高校へ行く予定でしたが、このようなことが分かって行く気がかなり無くなってしまうました。でも最近、高校へ行こうという気持ちが強くなってきました。その理由は将来の夢を見つけたからです。

まず、私の夢は音楽クリエイターになることです。それまでは何になろうかも決めていませんでした。でも、最近とても好きな音楽を見つけて、それに影響を受けて自分で音楽を作り始めました。最初はただの趣味でしたが、これを将来の仕事にできるんじゃないか？と気づきました。それで、私は音楽クリエイターになると思います。たのです。そして色々考えました。音楽クリエイターになるためのパソコンの技術力や人との関わり方など、仕事に不可欠なものがあまり身についていないことに気づきました。私が希望しているのは札幌にある学校の高等部です。そこは最先端の技術を活かした場所で、手足の不自由な人でも勉強や仕事、遊びなどができる素晴らしい場所です。私は一生車椅子で過ごすので、できる仕事に限られています。それで、パソコンなどの技術力が絶

対に必要なというのがハッキリと分かりました。なので、私は高校へ行ってパソコンの技術力や社会人の基本などを学ぼうと思ったのです。

私は高校へ行くべきだと思います。理由は、将来の進学や仕事、人との交流に役立つのではないかと思うからです。

（肢体不自由・病弱特別支援学校の部）

作文部門 高等部）

「職場実習を終えて」

北海道岩見沢高等養護学校二年

松井 夏澄

私は、十月三日（月）から七日（金）に、北海道セキスイハイム工業株式会社で五日間の職場実習をさせていただきました。私が決めた実習の目標は、「正しい言葉づかいや身だしなみを意識する」「周囲の方に気を配ったり、わからないことはすぐに聞いたり行ったコミュニケーション面を意識する」ことでした。七月に事前面接で会社を訪問したときに、学校の勉強で使ったことのないCADを上手に使えるよう頑張ろうと思いました。社員の皆さんが優しい印象を抱き、安心しました。

十月三日、いよいよ職場実習が始まりました。まず、実習内容です。CADを使って施行取込、生産・据付工

程表や最終図面を作製すること、Excelを使ってプラン変更依頼書に記述されていることを一覧リストにコピーアンドペーストをすること、仕様変更依頼書などにハンコ押印作業、二つ折り作業、コピー機を使って書類の複写、伝票仕訳、現場安全作業のモニタリングなど、多くの新しい経験をさせていただきました。

今回の実習でCADという製図ソフトを初めて使用し、最初は難しそうと思っていましたが、社員の方が丁寧に教えてくださったおかげで、すぐに実践することができてうれしかったです。モニタリングという作業では、安全フックが装着されているかなどの確認をしたり、ユニットと呼ばれる箱状のものをチェーンに取り付けるときに斜めではなく平行に吊られているかもモニターを見て確認したりしました。ひとつの工程を誤るといのちの危険があるので、しっかり見て報告をしました。ハンコの押印作業では、学校の商業科の授業でも練習はしていましたが、実際の仕事場できれいに押すのは難しかったです。最終日に外部仕様図の保管をして、年月日を見て、ハンコが全部に押されているか確認をして分けていくという作業をしました。確認が必要な書類が大量に机の上に載せてあり、すべてはできませんでしたが、全力を尽くしたと思っています。

お昼休みは、女性職員の方が昼食と一緒に食べてくださったり、お話ししてくださったりして楽しく過ごすことができました。その中で同じ趣味の方がいて、とても

うれしかったです。

五日間の職場実習を終え、一軒の家を建てるのにはこんなに沢山の方たちが協力し合ってつくられているのだなあと改めて感じることもできました。目標の反省としては、正しい身だしなみや時間を守ることは意識できました。「はつきり声を出して話をする事」「はやく正確に作業できるようになる事」ができるようになりたいと感じました。私の仕事について、担当の方から

「丁寧に仕事をしていて良かった。」

と言っていたので、これから学校や家でも自分のやるべきことに丁寧に取り組み、社会や会社に貢献できる社会人を目指したいと思います。

（肢体不自由・病弱特別支援学校の部

朗読部門 小学部）

「爆笑した運動会」

北海道手稲養護学校 小学部四年

鈴木 桜子

六月十五日に病院内の教室で運動会をしました。参加した人は、私とお母さんと嶺岸先生と小田先生です。やった種目は、ポップチューブつなぎと玉入れ、おたまリレー、太鼓の達人の四種目です。この種目を考えた理由は、筋肉痛になるぐらい腕の運動になるからです。

運動会をやるうと思つた理由は、友達から運動会をやると聞いて、自分もやってみたいと思つたからです。

準備は、ポスターを考えたり、ルールを考えたり、題字を水書道で書いたりして、とても大変でした。

一番心に残つた種目は、太鼓の達人です。理由は、めちゃめちゃ笑つたからです。リズムに合わせて後ろの看護師や五十嵐医師が

「ドン！」

と言いつながら、旗を振つて応援している様子がおもしろかつたからです。総練習の時は二、三回間違えたけれど、本番は間違わずにフルコンポができました。

運動会の後は、アイス協会からもらったバナナアイスを屋上で食べました。運動した後のアイスはかくべつでした。本当におもしろかったです。

今回の運動会では、十四対二十六で私のチームが勝ちました。優勝の賞状がもらえて、とてもうれしかったです。また、運動会のほかに劇を考えてやりたいです。

（肢体不自由・病弱特別支援学校の部

朗読部門 中学部）

「これまでの入院生活を振り返つて」

北海道手稲養護学校 中学部二年

森 健祐

これまでの三ヶ月の入院生活は、学校や病院で色々な人と交流することができました。前の学校では、こんなにクラスの人とか友達と交流したことがなかったので楽しかったです。

たとえば、ふだんの病棟生活においてHさんとAさんの散歩に付き合ったり、プレイルームから食堂に連れていったり、話し相手になってあげたりしました。いままで入院する前は年下の子とかいなくて、お世話したいし、たことがなかったので、初めての経験にしてはとても良いと思いました。

これからしたいことは、十二月に退院するので、それまで残りの入院生活は三ヶ月もあるので、今後も転入や転校する人が増えてくると思うので、色々な人とこれからも交流したいです。

（肢体不自由・病弱特別支援学校の部

朗読部門 高等部）

「僕の目標」

北海道手稲養護学校 高等部二年

伊東 匠

僕は、手稲養護学校高等部二年の伊東匠です。岩見沢高等養護学校からやってまいりました。

最近の学校行事で文化祭があり、僕はステージの上で

司会をやりました。本番は手術直後で、なかなか声が出にくい状況で、そのなかでも自分の持てる力を出せたのでよかったです。発表の後の模擬店も売れたのでよかったです。

手術前はそんなに怖くなかったけど、いざ手術本番になつてみると、めっちゃめっちゃ怖かったので、ちょっと緊張しました。

僕は少しでも早く立てるように努力して参りたいと思います。そして、早く岩見沢高等養護学校の最前線で復帰できるように頑張りたいと思います。

僕は実習では、しっかりとあいさつをすること、しっかりとお礼を言うこと、まずは、それを第一目標としながら、修正するところは修正する、抜くところは抜くといったメリハリをつけた実習ができたらいなと思います。

仕事中はもちろん集中して、オフはオフでしっかりやっていきたいなと思います。

退院したら友達にまっさきに連絡して、早く岩見沢に戻りたいです。

これで僕の発表を終わります。ご静聴ありがとうございました。

（知的障がい特別支援学校の部 中学部）

「校外学習の思い出」

北海道美唄養護学校 中学部三年

佐藤 優太

私たちは、十月二十七日に岩見沢に行ってきました。九時二十分ごろ学校からイオン岩見沢店にむかって教育委員会のバスで出発しました。むかっているときに、土肥先生や吉川先生といろいろなお話をしました。このときは、どきどき楽しみという気持ちが強かったです。

イオン岩見沢では、まず最初にしようめいしやしんをとりました。せすじをのぼすのをいしきました。練習より本番の時のほうがきんちようかんマックスでした。そのあとは、お買い物をしました。タイマーとメモ帳をゲットして、やったーと思いました。でも、お札が入るようなおさいふはなくて、ちよつとざんねんでした。次は、ガチャガチャをしました。最初は、何にしよう、たくさんあるなあとまよいました。まよったけっか、わくせいボールにしました。次はゲーム体験です。たいこのたつじんをやりました。気分とテンションが上がって、最高でした。

次は、イトアップ岩見沢店に行きました。その時もうすでにおなががすいていました。しかも、たくさん食べ物がいっぱいあって、まよいました。お客さんにぶつ

からないよう食べ物をとることを気を付けました。一時間十五分くらいたくさん食べました。一番おいしかったのは、サーモンとなつとうまきとウインナーとしょうゆラーメンとやき肉でした。あと二時間いたいぐらい最高でした。なんと、しゅうとさんがおしるこアイス在五はいも食べていました。それぐらい好きなんだというのがわかりました。本当にしよげきでした。あと、イトアップでは、やき肉をやくのが楽しかったです。やけどをしないように気を付けました。そのあと、一キロくらい歩きました。食後の運動という気持ちでした。

そのあとは、バスや電車やタクシーに乗って学校に帰ってきました。電車の切符を買うときに、最初は困っていましたが、平野先生にアドバイスをもらってできました。

はるとさんが行けなくてさみしかったです。楽しかったです。

高校生になったら札幌方面に行って、やっぱりみそラーメンを食べたり、札幌そうせいスクエアに行ったりしたいです。そのときは、アドバイスがなくても自分で切符を買いたいです。

（知的障がい特別支援学校の部 高等部）

『口実』が『仕事』へ」

北海道小樽高等支援学校 三年

井鳥 将太

中学三年の頃、私はどの高校に行きたいか迷っていました。なぜなら、何の勉強がしたいかわからなかったからです。高校見学に行ってもやりたい勉強を見つけないとができませんでした。中学三年の夏ごろ、定員が多くて入りやすそうだったのを理由に、小樽高等支援学校の環境・流通サポート科を第一志望に決めました。正直にその理由を面接の中では言えないので、志望理由を色々探しました。ふと、先生に

「鏡拭くの、うまいね。」

と褒められて嬉しかったのを思い出したので、それを口実にしました。受かったときは進路が決まって良かったとほっとし、宇宙へ飛ぶほど嬉しかったです。

無事入学したあと、作業学習が始まりました。最初は、頑張っについていこうという気持ちで取り組んでいました。でも、その気持ちはガラッと変わりました。二年の校内実習でのことです。教室清掃・会議室清掃・理科室清掃。二週間毎日作業学習で、毎日清掃に取り組んでいくうちに、あれっ？清掃って楽しい！と思うようになったのです。毎日続けて取り組んでいくうちに、だんだん

できるようになってきたからだと思います。技術を上げることにやりがいを感じるようになりました。好きなことには、とことん取り組める性格なので、技術もどんどん上がり、校内の清掃検定では、何回も二級を取ることができました。練習では「拭き残しを出さない」「やっけないところがないか確認をする」など、たくさんのことを注意されます。私は、正直、人に指摘されることが好きではありません。高校に入学してから、指摘されることが多いらしいので、受け入れられないことが多くありました。でも、検定の練習を繰り返すうちに、アドバイスを素直に聞いたほうがうまくなることに気付く、清掃の技術だけでなく、清掃の技術を上げるために必要なアドバイスを素直に身に付けることもできるようになりました。また、何度も再検定を経験し、失敗しても落ち込むのではなく、さつきよりも良くなるようにしようと前向きな気持ちで取り組むことができるようになりました。

三年の九月になり、前提実習が始まりました。実習先は大学内の清掃です。一期の時にも実習させていただきました場所でした。今まで行った実習先の中で、一番居心地が良くて、自分に合うと思った職場だったので、ここで働きたい、この施設の方々に認めてもらえるように頑張りたいと強く思っていました。だから、前回の実習で覚えていたことを生かして職員の方をサポートできるように積極的に取り組みました。新しいことを教えていただい

【全国盲学校弁論大会北海道代表作品】

「二つの橋をつなげて」

北海道札幌視覚支援学校 中学部三年

中村 奮咲

たときは、アドバイスを素直に受け止め、てきぱきと取り組むことを意識しながら何度も繰り返し、やり方を覚ええました。働かせてもらえるようになったら、すぐに職場の人たちについていけるようにしておきたい。もっと精度を上げて、全部最後まで自分の力で取り組めるようになりたい。そう思っていて取り組んだ結果、職場の方に「四月から来るのを待っているよ。」

と言っていたことができました。

少しずつ高校生活が終わりに近づいていく中、今はもう終わるの？という気持ちです。高校生になってから寄宿舎生活が始まったり、クラス替えがあったりと生活が大きく変わる出来事が続き、慣れるのが大変で辛かった。高校生活は長いなあと思うながら過ごしていました。が、気付くと夢から覚めたように時間が進んでいました。最初は「口実」だった清掃への思いも、やがて「やりがい」に変わり、今は「仕事にしたい」と思うほどになりました。そう思える今があるのは、辛いとき支えてくれた母や、熱心に何度もアドバイスをしてくれた先生方のおかげです。どこまで成長できたかはわからないけれど、昔よりは大きくなれたと感謝しています。もっともつとこれから大きくなっていきたいです。「アドバイスを素直に受け止めること」「失敗してもくじけず、反省し、改善していくこと」。高校生活で学んだことを生かし、清掃の道を全力で進んでいきます。

みなさんは、二刀流という言葉を知っていますか？

二刀流とは野球の大谷選手のように、ピッチャーとバッターの両方の技を使うことです。私は今、墨字、普通文字と点字の両方を使う、文字の二刀流を目指しています。

点字を幼稚部から習い始めました。私の見えづらさでも読める字があると知って、これなら点字と友達になれそう、よろしくねという気持ちでした。

さらに小学部になると、これから点字と一緒に生活していくんだ、読め書きできるように頑張ろうと思いました。

点でできた形を勉強し、そしてだんだんマスを増やし、単語を覚えていったという記憶があります。指先から伝わる「ざらざら」した模様みたいなものが、やがて一点一点に変わり、それが短いまとまりになっていきました。点字には三つの思いがあります。

一つ目は、はじめて一冊の点字の本を読んだ時のことです。小学部三年生の時に先生から「少し長い本も読めたらいいですね。」

と話があり、図書室で、「なぜどうして？身近な疑問」という本を借りました。私は、点字で墨字の本を読めてしまうなんてすごいな、誰がこの点字の本を作ったのかな？と思いました。それから、これまでたくさん本を読み、多くの知識を得ることができました。

二つ目は社会の中の点字の存在です。買物や学習で街に出た時、商品名やエレベーターの操作盤、自動販売機、ポストなど、様々な所に点字が存在していました。

三つ目は手紙や礼状など、間違いがあつてはならない正式な文章を書けるようになったことです。自分でもすごいなと思いました。

昨年「点字の歴史」という本を読みました。この中には点字を発明した、ルイ・ブライユさんや、石川倉次先生、小西信八先生のことが詳しく書かれていました。

点字にはものすごい歴史があることに驚き、発明してくれたことに感謝しました。また、北海道出身で、日本点字図書館を作った本間一夫さんと点訳奉仕者のみなさんのことも載っていました。全ての人に読書の喜びを伝えた本間さんを尊敬し、そして「点訳奉仕者」という名称を初めて知り、心の中で奉仕者の方々にお礼を言いました。点字の本を初めて読んだ時に、ふと浮かんた、誰が点字の本を作ったんだろう？という疑問の答えがはっきりと見わかりました。

点字は学校だけではなく、広く社会で認められ、使われているとわかってきました。これからも点字と共に歩

んでいきたいと思っています。

点字にすっかり慣れて、読み書きができるようになった小学部四年生のころ、先生の教科書がとても気になりました。

「先生はどのように教科書を読んでいるんですか？だって、すばやいから。」

と尋ねると、先生は

「点字だけではなく、墨字という文字もあるんだよ。」

と、教えてくれました。墨字という言葉は知っていました。私が「文字を読む」ということで墨字を初めて意識しました。私の目に映った墨字は、細い線に見え、残念ですが読むことはできませんでした。

そして、墨字には、ひらがな、カタカナ、漢字、アルファベットがあるということも知りました。中でも漢字は小学部の時には読み方、中学部では画数や偏、冠、書き順にまで興味を持って学んでいます。とってもおもしろいです。そして、いま自立活動の時間に、音声を使ってキーボードのローマ字入力と文字変換の学習をし、自分の iPad から Classroom へほぼ毎日発信しています。

「点字について話そう」という本の中で、福井哲也さんは「パソコンを使って普通の文字を、誰にも頼まないで書けるようになった時は、今まで地面を這っていた虫に突然翼が生えて、飛べるようになったぐらいうれしかった」と書かれています。とても共感しました。私も同

じ。墨字と点字の壁が取れたようでした。もっと練習を続けて正確な文字変換をしながら、文章を作っていくことが目標です。

私は言葉が大好きです。ひとつひとつの文字によって作られた言葉。そこには魂が宿っていると感じるからです。

「文字」は「人と人との関係を結ぶ大切な橋」です。私は、将来、点字と墨字の両方を扱うことができる「文字の二刀流」、つまり、「文字の通訳者」を目指したいです。

ブライユさんが世界で初めて点字を考えられてから、二〇二五年で二〇〇年になります。私は改めて点字に感謝し、その技に磨きをかけたいと思います。しかし、墨字の修行はまだ入ったばかり。「石の上にも三年」。これから文字の学習を耳と指先を通して進めます。